No.34
2010.2.24

いしかわの遺跡

第11回 古代体験まつり

毎年好評の秋のイベント“古代体験まつり”は、埋蔵文化財センターを会場に平成21年10月3・4日(土・日)の2日間、開催されました。当日は、天候にも恵まれたことで、大勢の家族連れに来場していただき、賑わいをみせました。

古代音楽研究家による古代琴の演奏や古代衣装試着・縄文弓矢・サトイモ収穫などのいろいろな体験に、来場された方々は楽しいひとときを過ごされ、思い思いに古代の息吹を感じていたようです。

財団法人　石川県埋蔵文化財センター
Ishikawa Archaeological Foundation
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail　mail@ishikawa-maibun.or.jp
ホームページ http://www.ishikawa-maibun.or.jp/

古代体験

古代体験まつり

古代体験学習講座 ～縄文土器づくり～

古代体験学習講座は、出土品の観察や研究成果などからみえてきた、古代の人々の生活や技術を体験する「本物志向」の学習講座です。

平成21年9月13日（日）に開催した「縄文土器づくり」では、県内で出土した縄文時代中頃の土器を目の前に、土器づくりにみられる縄文人の「知恵」や「ワザ」を用いて、土器の形作りに挑戦しました。続いて、時代や地域によって様々な特徴をもつ土器の文様に込められた「こころ」を探り、現代の体験者の想いものせて文様を描き、土器を仕上げていただきました。

作品は、10月4日（日）の古代体験まつり2日目に、体験ひろばにおいて野焼きを行いました。参加者が見守る中、大きな炎に包まれた土器は、炎の勢いをそのまま写しとったような「縄文土器」へと焼き上がりました。

古代体験学習講座 ～須恵器づくり・青銅祭器づくり～

須恵器づくり

10月25日（日）に開催した「須恵器づくり」では、古墳時代中頃に、朝鮮半島から様々な文化とともに伝わってきた「須恵器」を製作しました。作品は、11月に古代体験ひろばの復元古窯で、74時間かけて焼き上げました。

現代の食器の原形ともいえる「杯」や「壺」づくりに挑戦していただきました。

焼き上がった作品は、出土品と比べると、やや白っぽい色合いとなりましたが、自然釉のかかる独特の「須恵器」ができあがりました。

青銅祭器づくり

11月29日（日）に開催した「青銅祭器づくり」では、県内の出土品をモデルとした鋳型に、溶かした合金を流し込んで「鏡」と「剣」を製作しました。午後からの仕上げ磨きでは、古代の“輝き”を求め、皆さん夢中に研がれていました。

平成21年度発掘調査から

大泊A遺跡

大泊（おおとまり）A遺跡は、七尾市の南東端、富山県氷見市と境を接する七尾市大泊町地内に所在します。眼前に富山湾、背後には石動山系の低丘陵が迫る、狭い平野部に位置する遺跡です。遺跡周辺域は「釜崎（かまざき）」と称されており、付近で釜を鋳造していた、あるいは大釜で塩を作っていた、という二説がその由来として伝えられています。また以前より水田の壁面に製塩土器を含む遺物包含層が露出していたことから、付近は製塩関連遺跡の包蔵地としても知られていました。

1次調査区全景（南東から）

発掘調査は、一般国道470号能越自動車道（七尾氷見道路）建設に伴い平成20年度から着手し、今回の調査は2次調査となります。前回の1次調査では、奈良・平安時代の製塩炉を複数基、近接地に作業小屋的な性格が推定される掘立柱建物2棟などを確認しています。

今回の調査範囲は、山側と海側の2地点に分かれ、計3,350㎡を対象としました。調査の結果、山側調査区は遺構・遺物ともに希薄でしたが、海側調査区では全域で多量の製塩土器片を含む、奈良・平安時代の掘立柱建物や複数の溝や大小の土坑など、多数の遺構が確認されました。今回の調査では、製塩炉は確認されませんでしたが、その一方、古代面より下の層からは、弥生時代の土坑や古墳時代の竪穴建物、古墳時代のカマドの内部からはほぼ完全な形の製塩土器が出土するなど、注目すべき遺構や遺物の発見が相次ぎました。

1次調査の製塩炉（西から）

今回の調査により、本遺跡における製塩活動は奈良・平安時代以前の古墳時代に遡ることが明らかとなりました。今後はこれらの成果を基に、本遺跡における製塩活動の変遷や、製塩土器の変化などについて検討を深めていきたいと考えています。

海側調査区：完掘状況（南から）

海側調査区：古墳時代カマド内出土製塩土器

成町遺跡

成町（なりまち）遺跡は、JR松任駅から約1㎞南西、白山市成町地内に所在し、北陸新幹線建設（車両基地路盤整備等）に伴い、2,300㎡を対象に発掘調査を実施しました。調査の結果、弥生時代終末期～古墳時代前期を主とする集落跡であることが確認され、竪穴建物・布掘建物・掘立柱建物・川跡などを検出しました。

竪穴建物は、1辺約8.7mの方形のものを建てたあとに、やや小型のものを、同じ場所で同じ方向に建て替えていることが確認されました。古墳時代前期の土器、打製石斧などが出土しています。

布掘建物は、南東―北西方向の溝を2本平行に掘り、それぞれ柱を3本立てていることが確認されました。掘立柱建物は、3間×1間を2棟と、2間×1間と推定される2棟が、南西―北東方向に建てられていました。また、南北方向に3間×2間で、南側に庇（ひさし）が付くと考えられる建物も1棟確認しています。

これらは、調査区の東端で検出した川跡の南西側にあたり、集落の中心部であったと推測されます。しかし、対岸にも遺構がみられることから、集落の範囲が広がる可能性が考えられます。また、奈良・平安時代の須恵器などが出土し、鎌倉・室町時代の水路と考えられる溝も検出していることから、調査区内もしくは周辺で、奈良時代～室町時代の集落が存在した可能性が考えられます。

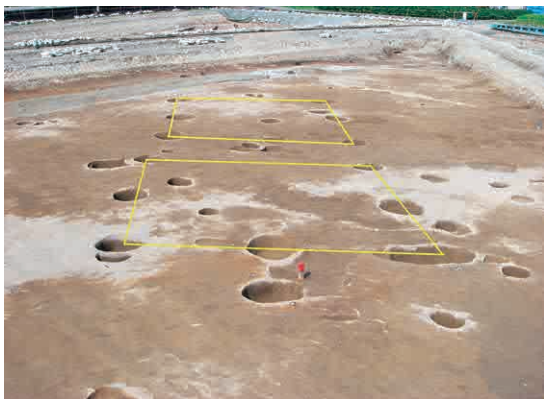
完掘状況（西から）

完掘状況（北東から）

黄：掘立柱建物　赤：竪穴建物
白：布掘建物　青：川跡

竪穴建物（南西から）

竪穴建物内遺物出土状況



掘立柱建物（南西から）

環日本海文化交流史調査研究集会

平成21年10月23日に環日本海文化交流史調査研究集会を開催しました。この集会は平成12年度から毎年開催しており、本年度で10回目となります。今回のテーマは「日本海域の土器製塩―その系譜と伝播を探る―」です。

土器製塩には二つの系譜があります。一つは縄文時代後期に関東地方ではじまり、東北地方の弥生時代中期で衰退するもの、もう一つは弥生時代中期に瀬戸内地方ではじまり、各地に伝播していったものです。後者の系譜は、北陸地方を含めた日本海沿岸域にも波及していきましたが、その伝播ルートに沿って数多くの製塩遺跡が確認されています。

研究集会では後者の系譜、特に土器製塩が各地に広がり地域的特色をみせるようになる古墳時代から、終焉をむかえる古代にかけての時期を中心に、九州から東北地方の8名の方が、製塩土器の器形や製塩炉の構造など、各地の土器製塩の状況について、それぞれの地域の事例報告をされました。その後、日本海側沿岸地域における土器製塩の系譜と伝播、製塩工程およびその時代背景等について検討、討論がなされました。

発表の様子

事例報告では、当センター職員により七尾市大泊A遺跡から発見された製塩土器が出土した古墳時代のカマドや古代の製塩炉などについて報告があり、現在調査中の遺跡からの最新情報でもあり、注目を集めました。

討論では、製塩土器の形態・機能や製塩炉の構造、あるいは焼塩土器の出現に見られる製塩土器の機能分化の動きなど、報告内で挙げられたいくつかの課題について意見交換が行われました。

討論の様子

翌10月24日には、資料見学会を行い、珠洲市鵜島遺跡、珠洲市大谷中学校東遺跡、能登町真脇製塩遺跡、七尾市三引遺跡、七尾市小島西遺跡、志賀町米浜遺跡など県内13遺跡の出土資料の見学・検討を行いました。

畿内方面の影響を受けた脚台付製塩土器や、古墳時代後期から古代にかけて能登半島全域で使用された棒状脚製塩土器、あるいは若狭で発生し東方へ伝播した大型の平底製塩土器や、富山県などにも分布する円孔をもつ円筒形土製支脚など、さまざまな製塩土器を観察することができ、土器製塩の発展・伝播についての知見を広める機会となりました。

資料見学会の様子

収蔵品ギャラリー

当センターが保管している数多くの出土品の中から、選りすぐりの「収蔵品」をご紹介します。今回のテーマは「能登半島の土器製塩」です。

収蔵品No.21　能登半島の製塩土器

－珠洲市鵜島遺跡　七尾市小島西遺跡・鰀目ゲンヤマ横穴群　志賀町米浜遺跡－

石川県の北部、能登半島の沿岸部では、弥生時代から平安時代にかけて土器を使った塩づくりの遺跡が、200ヶ所以上で確認されています。弥生時代後期から古墳時代後期までは脚台付の土器(写真右下)が、古墳時代後半から平安時代までは棒状脚の付いた土器(写真右上･中央)が使われました。奈良・平安時代には、丸底や平底の製塩土器や土製支脚(写真左側)が使われました。それとは別に金沢市畝田・寺中遺跡や野々市町末松遺跡などの加賀地方の集落まで運ばれた製塩土器もあります。

製塩土器は、海藻などを利用して塩分濃度を高めた海水(鹹水)などを煮詰める為に作られた土器です。同時代の調理の土器と比べると、作りは粗く、粘土紐の痕もそのまま残されているものが多くみられ、また、濃い塩水を長い時間かけて煮詰めるために、土器は赤くもろくなっています。そのため、土器を使った塩づくりの遺跡からは大量の土器の破片が出土しますが、写真のように復元される製塩土器は非常に貴重な資料です。

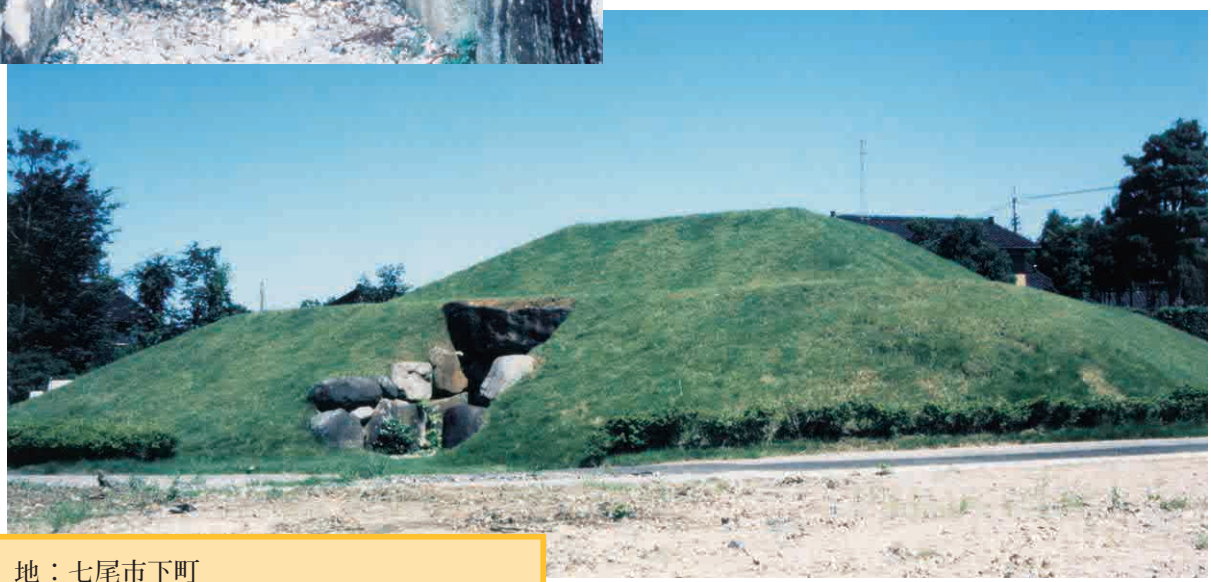
訪ねてみよう能登・加賀の遺跡

県指定史跡　院内勅使塚古墳（いんないちょくしづか）

院内勅使塚古墳は、七尾市街地から南南西へ6km、二宮川流域の平野部に位置しています。古墳の存在は江戸時代から知られており、『能登志徴』に「飯川の穴倉」として紹介されています。昭和44年には、七尾市史編纂（へんさん）事業にかかる墳丘・石室の実測および周溝の確認調査が行われ、一辺約23m、高さ3.7m、墳丘が二段の方墳で、幅約6mの周溝があることがわかりました。また築造年代を示す7世紀前半の須恵器などが出土しています。石室は長さ約12m、幅約2m、高さ約2mで、30個以上の巨石を組み合わせて構築されています。天井石などの大きいものでは10ｔ近くもある石を用いており、北陸地方で最大級の横穴式石室です。昭和47年に県指定史跡となり、保存と整備が行われています。

この古墳の築かれた時代には、七尾湾沿岸の海岸段丘上に小規模の古墳がたくさん造られますが、その中でも群を抜いた規模であり、中心的存在です。被葬者は、能登の国造（くにのみやつこ）であった能登臣（のとのおみ）氏の可能性が考えられています。

石室内部



所　在　地：七尾市下町

交　　通：ＪＲ徳田駅から徒歩5分

お問い合わせ：七尾市教育委員会文化財課
電話　0767-53-8437